

神様お願い!

3

「神様のトバッチリで
異世界に転生したので
心穏やかに
スローライフを送りたい!」

きのこのこ
Kinokonoko

Illustration: 吾夢いちゆ。

登場人物紹介

ツクヨミ

ナユタの左目に宿る神様の欠片。
ナユタから色々学習中。

石原那由多

いしはらなゆた
ひよんなことから異世界の
とある魂なき肉体に魂を宿らせ転生した男性。
左目に入った神様の欠片をバートナーに、
自由気ままに異世界を生きていることに。

アル

ナユタに助けられ、
行動を共にすることになったカーバンクル。

ランガルト

アネットの父で、
グラキエグレイペウス公爵家当主。

ティーモ

ランガルトの養子。
ナユタを弟のように可愛がる。

アネット

ナユタの肉体の母親。
帝国の皇后で、珍しいスキルを持つ。



第一章 公爵領と帝国の皇子

帝国の皇子×モルゲンフルスの街

俺、石原那由多^{いしはらなゆた}はひよんなことで命を落とし、この世界に転生した。

しかも三歳児の姿で、左目にはこの世界の神様がいつの間にかちやっかり宿っていた。

左目に宿る神様にツクヨミと名付けた俺は、前世で集めた御朱印^{ごしゅいん}を通して日本の神様から力を借りる固有スキル——【天神地祇^{てんじんちぎ}】や、全てのスキルを使える固有スキル——【十全十美^{じゅうぜんじゅうび}】の二つを駆使しつつ、この世界を生きることを決意する。

その後俺は、ツクヨミの案内で、かつて天空に浮かんでいた城塞都市^{じょうさいとし}【妖精の箱庭^{せうけいのせうてい}】という遺跡に辿り着くと、地下にあったジオラマの中の町——アンダーザローズでの生活を始めた。

近くにある【黒妖精の穴蔵^{くませうけいのくわくら}】というドワーフの町にも足を運んだり、森を散策したりと、のんびりと過ごしていたのだが……ある日、この転生後の体の本来の持ち主である少年の母親や親族が、【妖精の箱庭^{せうけいのせうてい}】へとやってくる。

彼らはある帝国の公爵の一族だったのだが、呪い^{のろ}によって母様は人狼^{オオカミ}の姿に、それ以外のお

祖父様やその他の一族の人たちも狼の魔獣の姿に変えられていた。

俺はツクヨミや日本の神様たちの力を借りて、その呪いを解くことに成功するのだった……あ、呪いはしっかり術者に返したけどね。

そしてその後は、【妖精の箱庭】を整備したり、カーバンクルのアルを拾ったり、異世界生活を楽しんでた。

今はグラキエグレイペウス公爵領の主都であるモルゲンフルスに向かう途中、猫妖精の里に寄ってから、再出発したところだ。

これからは、基本的にはモルゲンフルスが活動の拠点になるので、どんな街なのか楽しみだな。

一度休憩を入れ、再び魔馬たちの蹄が奏でる爆走音を聴きながら、【静かな森】に行く。

今俺たちが通っているのは、「精霊の道」と呼ばれるもの。

精霊使いだけが使える、任意の場所まで直通させる通路だ。

猫妖精の里を出るには、この精霊の道を使わないといけないからな。

仰向けになってふうふう謎のイビキをかいて眠るアルのお腹を撫でながら、濁流のように流れて見える木々を車窓から眺める。

そうこうしているうちに、やがて森が途切れ、開けた道に出た。

御者の魔力が収束すると、馬車はゆっくり大地へと降りる。

どうやら森を抜けたところで、精霊の道から出たようだ。

森を抜けた先には広大な平野と畑が広がっており、手作業で麦や野菜を刈り取る人々が、ポツポツと遠くに見えた。

輪作用なのか、放置され休眠している土地も見える。

小高い山のふもとの方には放牧場があるのだろう、毛足の長い動物たちが何匹も歩いている姿も見えた。

そんな光景を見て、ティーモ兄様が嬉しそうな声を上げる。

「ナユタ！ ここからがお義父様が治める地だよ」

「わあ！ 広大な麦畑ですね」

緩やかな川も流れてるし、長閑な田園風景が広がっていて、なんというか……思っていたより牧歌的だ。

お祖父様も母様も戦闘能力がとんでもないことになってるから、もっと殺伐とした領地を想像していたんだけど。

ちなみに、今まで通ってきた静かな森も、国としてはグラキエグレイペウス公爵家の治める土地だけど、妖精族と不可侵条約を結んでいるらしい。

だから最低限、旅人が通るであろう道を整備しているだけって母様が言ってた。

そんなことを思いながら、風景を眺めていると、ティーモ兄様がまたしても嬉しそうに言う。

「私は行ったことはないけれど、もつとずーっと先には、海もあるみたいだよ」

「ほわー。釣りをしに海へ行きたいですね」

田園地帯もあるし、牧場も山も川も海もあるなんて、なんて恵まれた土地なんだ。お金持ちなのも頷けるね。

「海に行くには、【黒い森】を抜けないといけないから大変みたいだけど、ナユタと一緒にだったら海まで行けそう！」

「ダメよ、ティーモ。【帰らずの森】と同じく危険な森なのですから、勝手に行ったらお父様に怒られてしまうわ」

「はあーい」

ティーモ兄様が母様にチクツと窘められた。

帰らずの森……俺が捨てられた森だ。

ダンジョンのようなものになっていて、強力な魔物も多数生息していた。

そこと同じという、とても危険ということだ。

『強いどころか、非常に貴重な薬草や魔獣、そして幻獣もいそうですね。こっそり探検しに行きませんか？ 記憶する森と同じくダンジョン仕様ですので腕が鳴りますね。ふふっ』

そんなツクヨミの声が、俺の脳内に響いた。

まったく。ツクヨミは黒い森——新しいダンジョンを、また支配下に置くつもりか。

というか……

『幻獣？』

思い返せば、お祖父様の魔馬を鑑定した時に、幻獣【滑走する者】の血を引くって書いてあった気になったんだよね。

それからカーバンクルも幻獣だったよね、たしか。

『はい。カーバンクルも幻獣とされますが、厳密にはカーバンクルは乱獲され個体数が激減し幻獣に近い、というだけで、純粹なる幻獣とはまた違います。純粹なる幻獣は、この星が生まれた頃より、それぞれの時代に各種一頭だけしか存在しない貴重な生き物のことですね。一頭が死ぬと、またどこからともなく他種族の母体を介して生まれ出る、不思議な生き物です』

『へえ。魔馬たちの血筋の、スレイブニルつてのもそれ？』

『はい。幻獣は、純血種こそ残せませんが、繁殖行為はできます。なのでそれぞれの時代でよく子孫を残していますね』
なるほど。

滅多にお目にかかれない、という点ではカーバンクルと同じくらい貴重な生き物のようだ。お祖父様の治めるこの地方に、そんな不思議な生き物がいるかもしれないと思うとワクワクするな。

馬車は長閑な田園風景を背景にしながら、軽快に道を走る。

ロバと一緒に歩く農民や旅装の人々を追い越し、やがて薄茶色の石でできた大きな城壁が見えてきた。

いくつか見える奥の山には、一つだけだいぶ古い趣の、朽ちた城が見える。

「ナユタ、ここが僕たちが住むモルゲンフルスの街の入り口だよ！」

ここが母様やお祖父様、ティーモ兄様が育った街……

城壁門には、荷馬車を引く農民や、冒険者なのか長剣を背に負った青年に、大きな杖を持った青年などが並んでいる。

その背後に、俺たちの乗った馬車がついた。

順番はすぐにやってきて、門番たちが俺たちを迎える。

念のためということで、ティーモ兄様や母様は魔道具を使って髪や目の色を変えていたのだが、その魔道具を取ると、門番たちは俺たちの正体に気づいた。

「お嬢様！ ティーモ坊ちゃん！ お帰りなさいませ!!」

「「お帰りなさいませ!!」」

声を揃えての挨拶は、なかなかの迫力だ。

俺がたじたじしていると、門番の一人がこちらを見て笑みを浮かべた。

「お話は伺っております。ようこそおいでくださいました！ グラキエグレイペウス公爵領主都、モルゲンフルスの街へ！」

帝国の皇子×朽ちた城

俺たちの乗った馬車は門番たちに見送られ、人々が行き交う大通りをひたすら進む。

この街は帝都とは違って、この地方で産出されるものなのか、はちみつ色の切り出した石で作られた家が多い。

街路樹も各家々に所々ある。

母様が教えてくれたんだけど、あの樹木は家人が生まれた時に、その月のシンボルツリーを植えているそう。そして、亡くなった時にその樹木を材料として、骨壺や棺にするんだとか。

人がいる数だけ木があるというわけだ。

自然と人工物が一体化した、綺麗な街だな。

そして建物以外でも、道も馬車が通りやすいように、はちみつ色の同じ石でしっかりと整えられていた。

城壁で囲われた範囲はかなり広く、街の中にもいくつか小さな山がある。街の外からも見えていた朽ちた城のある山は、近づくとなかなかの迫力だった。

馬車が向かっていたのはその城の手前にある、同じ山の少し低い位置にある、大きく立派な屋敷

だった。

「ナユタ！ あれが私たちの家だよ」

ティーモ兄様はその屋敷を指差しながら、無邪気に話しかけてくる。

それにしても、街に入っただけのこの距離からでも、あれくらい大きく見えると思うと、かなりの広さがある。

アンダーザローズでもグラキエグレイペウスの皆さんに屋敷を用意したんだが、その二、三倍はあるに違いない。

あの屋敷もけっこう大きいものを用意したつもりだったんだけどな……

しばらく馬車を走らせグラキエグレイペウス公爵邸へ着いた時、ティーモ兄様は、馬上にいる立派な服を着た門番に大きく手を振っていた。

ニコニコ顔の門番に見送られ、大きな門を潜る。

そして広い前庭を駆け、馬車回しへと回り、やがて止まった。

外にはすでに、数人の従者やお仕着せを着た女中たちが待ち構えていた。

侍従が馬車の扉を開けると、いの一番にティーモ兄様が飛び降りる。

そして母様と、俺の教育係であるセヴリーヌ伯爵夫人のペネロペ先生に手を差し出し、エスコートしていた。

ティーモ兄様は、その後降りた俺に、屋敷の人たちを紹介しながら案内してくれる。

小さな紳士である。

途中でやってきた家令のエメリッヒさん——帝都に残っている執事のクラススさんのお父さんだ——が、俺たちとは別行動で先に戻ってきていたお祖父様が帰宅した時から今までのことを話してくれた。

グラキエグレイペウス一族の合同葬儀を執り行ったそうだ。

ここまで一緒に来てくれたクヴァルさんたちは、亡くなった家人の弔いのため、実家の方へと帰還させた。

来年、また帝都に向かう頃に戻ってきてもらう予定だ。

そうして到着したその日は、ゆっくりと過ごすことになったのだった。

次の日からは、とんでもなく忙しくなった。

お祖父様は、領内にある六つの街や点在する村の浄化作業で不在。俺をこの世界に送り込んだり、この世界をめちゃくちゃにしたりした糞女神の影響が残っていると悪影響があるので、浄化作業をする必要があるのだ。

母様は母様でお祖父様がない間の訪問客の対応。

ティーモ兄様も、亡くなった従兄弟の友人たちの墓参りに行ったり、来年度から魔法学園中等部へ入学するのを目指して、早朝から剣と魔法の鍛錬をしてから午後は座学をしたり……とにかく忙

しそうだ。

俺はいえ、家族のみんなに比べたらだいぶ余裕がある。

本来であれば、これまで全く教育を受けていなかったもので、それを受ける必要があるのだが……
幼少教育で教わるという読み書きは、スキルのおかげで学び直す必要がない。

一方で、マナーやダンス、歩き方などは改めて学ぶ必要があるもので、それらの授業が午前中にある。

ただ、午後は暇になってしまうのだ。

なのでちよいちよい【黒妖精の穴蔵】へ行ったり、モルゲンフルスの街をうろちよると探検などをしたりしていた。

そしたら母様にお目付け役をつけられてしまった。

まあ、幼児だからお目付け役は仕方ない。

いくらツクヨミがいるとはいえ、周囲から見たらただの幼児だからね。

危険とはわかつちやいる。

けど、歳をとって衰退していた感情の起伏や好奇心がむくむく湧き上がるのが、また止められないだよ。

一方で、夜は夜で食事中にスコーンと寝ちゃうこともあるし。

大人の記憶があるせいか、どうにもこの小さな身体はままならない。

そんな俺のお目付け役に選ばれたのは、エメリツヒさんのお孫さんでクラウドさんの次男、ギルベルトくんだ。

クラウドさんと同じく、髪は明るい茶色で緑の瞳。なんというか、可愛い系の目がクリクリした小動物のような少年で、今年十六歳とか。

ギルベルトくんは、元々従僕をしていた。

そこから急遽、俺付きのお目付け役兼従者となったということで、俺の出かける先々についてくる。

俺の移動は転移を使うことが多いんだけど、まさか邪魔だからと言って、ギルベルトくんを置いて転移するわけにもいかない。別に邪魔でもないし。

最初の頃は、様々な場所に転移していたせいもあってか、ギルベルトくんは目を回して動揺していた。

けど最近は慣れたのか、冷静さを失わず俺についてくる。

なかなか戦闘能力も高かったので、魔獣が出現する森の探索にも、安心してついてきてもらっていた。

そんな感じで、俺は自由にモルゲンフルスの街を堪能していた。

そして今日は、屋敷の裏にある山の、あの朽ちた城にギルベルトくと共に来てみた。

エメリツヒさんが言うには、八代くらい前までは、グラキエグレイペウス家が居住していた城らしい。

ノートメアシュトラーセ帝国に統合される前までは、グラキエグレイペウスの土地は一つの国だった。

そしてこの街が、その国の首都だったとか。

城の土地は、標高の高さもあってメンテナンスの人員を送りづらく、自然に朽ちるのに任せて整地もされず放置されているそうだ。

なので、ちよつとお祖父様^{じい}にお願いして、その土地を貸してもらえないかなうなんて思ったんだよね。

母様にも許可を取ったし、モルゲンフルスを不在にしていたお祖父様^{じい}にも、通信魔道具のクリスタルで連絡を取り、許可を得られた。

しっかりと根回しを終えたので来てみたのだ。

『ツクヨミ、広さはどんな感じ？ 出せそう？』

『そうですね……ギリギリですが、少し掘り込んでいけば入りますよ』

『おっし。じゃあ上物^{うぶもの}を収納して、土台を作っちゃいますか』

そう、俺が出そうとしているのは、【妖精の箱庭^{ザシークレットガーデン}】。

修繕作業のために、良い感じの土地が欲しかったのだ。

この土地は、グラキエグレイペウス公爵家の裏手にある。

そのため不審者が入ってくることはないし、良い感じにひらけているのでちょうど良いと思ったのである。

そんな俺は現在、アルを頭に貼り付け、飛んでどこかに行ってしまったぬようにギルベルトくんにしつかりと抱っこされている。

自分では動けない状況なので、ちよつと城の崩れた城壁に近づくように、ギルベルトくんをお願いした。

『朽ちた城と土を収納……』

ペタリと城壁に触れて、そう念じる。

すると一瞬で朽ちた城は収納に入り、目の前には深く陥没した土地のみになった。

ちなみに、ツクヨミに頼んで、外からは今まで通りに朽ちた城が見えるようにしてもらっている。

街の外からも見えていた城だからね。それが急に消えたとなったら、とんでもない騒ぎになりかねない。

こうしたところで誤魔化すのは、ツクヨミにお願いした方がいい。

そこから魔道具を仕込むため、【妖精の箱庭^{ザシークレットガーデン}】を置く土台を、朽ちた城の石材と土で作り込んでいき、ツクヨミの指示通りに巨大な不可視^{マジックハンド}の手を駆使して積み上げる。

『このくらいで良いでしょう』

その後、収納から出した【妖精の箱庭】をゆつくりと土台に設置させる。

……と、ここでギルベルトくんを見てみたら、流石に啞然としていた。

「坊っちゃん、これは一体……」

「墮ちた天空の城郭都市、【妖精の箱庭】です。さあ中に入りますよ!」

「は？ え？ はい……」

俺の言葉に頷いたものの、ギルベルトくんはよくわかっていなさそうだ。

それでも彼は俺の言葉に従って、【妖精の箱庭】の門を恐る恐る潜る。

『建材も、今収納した朽ちた城のものをを使えばいいから、今日中には城壁の修理を終えられるかな?』

あの城の素材を使えば、だいぶ楽できるだろうと思って、ツクヨミに聞いてみる。

『そうですね。外郭部分はそれでいいでしょう。土魔法と建築の練度を上げる良い機会ですから頑張らしましょうね』

おっし。

それじゃあそれでいこう。

「ギルベルトさん、絶対にギルベルトさんの近くにいてどこにも行きませんから、降ろしてほしいです。ちょっとこの建造物を直すので」

「はっ？ はいっ。というか私のことはギルベルト、言いづらかったらギルとお呼びください」

未だ呆然と【妖精の箱庭】の建造物たちを見ていたギルベルトくんは、我に返ると「さん」は不要だと言いつつ降ろしてくれた。

この世の中、敬称をつけないと、ハラスメント的な何かになりそうでつい付けちゃうのが癖になっていたようだ。

ギル、ギル、ギル、よし。

「ギル、降ろしてくれてありがとう」

「……いえ。坊っちゃん、絶対に私から離れてはなりませんよ?」

「はい」

ギルにいつにも増して真面目な顔で注意される。

絶対離れませんよ。安心してください。

『ふふっ』

『どした?』

ツクヨミが噴き出して笑っているから気になってしまう。

『いえいえ、気にしないでください』

しかしそう言って何も教えてくれない。

ちまちまと崩れた外壁をツクヨミのアシストのもと、土魔法を駆使して作り上げていく。

『なあ、さっきの何だったんだよ』

『いえ。発音が、「じる」になっててウチの坊っちゃん可愛いー！ あゝ尊い、ってギルベルトくんに思われていますね』

『なんと』

ギルはあんなに真面目な顔をして、そんなことを思っていたのか。

俺としてはちゃんと言っているつもりでも、周りに聞こえていたのは、舌ったらずの子供の発音なのだ。

……自分では、しばらく気がついていなかったけど。

なんかちよっと恥ずかしい。

そんなことをツクヨミと話しながら、どんどん城壁を直していった。

割れて落ちている壁も、収納があれば楽々回収できる。

鋭利な棘とげがついた蔦つたも生えていたので全部切ろうとしたら、ツクヨミに勿体ないと言われてしまった。

なのでとりあえず、敷やぶになつているところを集中して刈り込んでいく。

そうして粗方城壁を直したところで、ギルからストップがかかった。

気付いていなかったが、それなりの時間がかかっていたようだ。

そんなわけでその日は家に帰り、また作業をいいところで終わって……ということは何日か

繰り返し、ついに六日目に、【妖精の箱庭ザシムレットガーデン】の上部、城郭部分が出来上がったのだった。

帝国の皇子×企画書

「……!! そんな馬鹿なことが……」

「ああああ……私の赤ちゃんが……!!」

泣きじゃくり、頬ほおを濡ぬらした女が、地面で寝かされていた子を抱き上げきつく抱きしめた。

「もう二度とあなたのことを離さないわ！ 母を許して……」

「おい、お前……ソレを！ 今すぐに離すんだ……!!」

男が無理矢理、女から子を引き剥はがそうと手を伸ばす。

「嫌よ!! もう貴方たちの言うことは聞かないわ！ この子はこうしてちゃんと動いてる!! 精霊の子なんて呪われた存在じゃないんつ……きゃあつ!!」

男は錯乱する女の頬を打ち、倒れた女から子を奪おうとする。

が、突如小さな手が子を掴つかむ男の手を払った。

『……神たる私に触れるとは、恐れを知らぬ塵虫ちみちめ。その恐れもわからぬ阿呆あほうに免じて最高の荣誉を与えよう』

「ひい……赤子がしゃべっ……」

『我が力の糧となるが良い。ゴミとて多少の成長にはなるであろう。この身体では尚更に……』



仕上がった城郭を高所から眺め、俺は満足して頷いていた。
とても頑張りました。

『後は、真ん中の【妖精の箱庭】の操舵室部分と建物の内部、そして地下にかけて補修になりま
すね』

『こうやってみると【妖精の箱庭】は綺麗な星形の土台だったんだな……』

俺が【妖精の箱庭】を発見して利用するようになった頃には、削られて土台部分がほとんど消失
していた。

しかし直してみたら、まるで五稜郭のような見事な星形だったのだ。

北国の本格的な冬が来る前に、崩れていた建物部分を順調に修復できたのは大きい。

元々【妖精の箱庭】が持っていた赤茶けた石と、再利用したこの公爵領独特のはちみつ色の石が
混ざった建物が綺麗に並んだ。

星の角部分は、将来的に空を飛ぶ魔獣を使役した時にベースとして使えるように、スペースを確

保してある。

星形の内部、五角形に囲う壁……いわゆる、郭の内部の空間も、しっかりと作り込んだ。

内部で兵士が移動できるようにしたのだ。

直してわかったが、最初俺が入りしていた門は、両側を城砦に挟まれた、立派な城門だった。

まだ全体が石の壁だけで内部は空っぽではあるものの、【妖精の箱庭】は、森にあった時と比べ
たらずいふんと変貌を遂げた。

俺とギルは、城門塔の階段を登り、塔の屋上から【妖精の箱庭】を眺める。

「兵士たちの居住区に、従魔用の厩舎、広場、鍛冶場や穀物庫に納屋、衛生塔に防御塔……小さな
町みたいだね」

「坊っちゃんが直すのをずっと見てきましたが、未だに信じられません……まさかこんな古代の建
物が、今ここに存在するなんて……」

ギルはずっとこんな調子だ。

『かつては、空飛ぶ騎獣にまたがる騎士たちが【妖精の箱庭】周辺で、速さや腕を競って訓練試
合をしていたんですよ。物見遊山にアンダーザローズの住民たちもここでよく見学していたもの
です』

ツクヨミのそんな声は、どこか懐かしそうだった。

ふと風が吹いて、騎士たちが振るう武器の金属音と人々の歓声が聞こえたような気がして、空を

見上げる。

勿論、空には誰もいるはずもなく、澄み渡った青い空だけが目に入った。

「……そろそろ旦那様がお帰りになる時刻ですので、屋敷に戻りましょう」

「はい」

そういえば、領地の浄化に奔走していたお祖父様が、今日ようやく帰ってくるらしい。

そのため、日が落ちる前に帰ってきてと母様に言われていたのだ。

お祖父様に会うのも、ずいぶんと久しぶりな気がする。

本当なら、お祖父様が出張つてまで、ここまで急いで浄化する必要はない。

でも、領民のために収穫の月の収穫祭と狩猟の月の狩猟祭までに浄化を済ませたかったらしい。

そのために、部下を引き連れて領地全体を駆け回っていたのだ。

この北の帝国の月は、十二月の月に分かれている。

前世の日本の暦でいう一月にあたる狼月を筆頭に、真珠月、日が長くなる頃の光月、休ませていた畑の開墾月、種蒔き月、白夜月、牡鹿月、干草月、収穫月、狩猟月、祈り月、雪月というような、生活に密着した月の呼び方になっている。

勿論、この月の名称はこの国独特の言い方で、他の国では数字だったり違うそうだが、概ね十二の月に分かれていて、それぞれの国同士で、互換性がある。昔の日本のように、ややこしい二十四節気とかに分かれていなくて良かった。

今は九月に当たる収穫の月。

どうやら収穫の祭りがあるみたいだ。ヨーロッパでいう、サンクスギビングデーやハロウィンつてやつかな？ この土地ではどんな祭りが始まるのだろう。

それと、来月の十月に当たる狩猟の月で行われる狩猟祭では、越冬用の食料の備蓄や毛皮を得るために、魔獣などを狩るそうだ。

『お祖父様も一言、浄化を手伝ってくれて言ってくれば良かったのに』

俺の方が浄化は早いし、転移もできるのに。

『そこは当主ですし。自領を見るところという目的もあるでしょうし、孫を頼るより自分でできることをしたかったのではないでしょうかね』

そんなお祖父様だからこそ手伝いたかったんだけどな。

実際に提案もしたけど、浄化用の聖水と魔力回復のポーションだけ支援してもらえば、後は大丈夫だと言われてしまったのだ。

あまり食い下がってもと思って引いたけど、こんなに大変だったなら、やっぱり手伝えばよかったと思わなくもない。

俺はギルにしっかりと抱えられて、グラキエグレイペウスの領地屋敷に戻った。

屋敷に戻った俺は、体を洗われ、綺麗な服を着せられる。今日はほとんど作業していないと言っ

ても、やっぱり汚れちゃってるからね。

そして母様やティーモ兄様とお茶を飲みながら、お祖父様の到着を待つ。

やがて到着の先触れが来たのか、屋敷は慌ただしくなってきたので、母様とティーモ兄様と揃ってお祖父様を出迎えに行った。

お祖父様は少しやつれていて、流石に心配になった。

だというのに、身支度を整えたら今度は収穫祭の準備とのことで、街や村の有力者と会合するとか言つて、また出ていってしまった。

挨拶できたのはよかったけど、とても慌ただしい。

母様も、調べ物をしたり、お祖父様が帰ってきたので晚餐のコースをどうするかシェフと相談したりと、地味に忙しい。

調べ物というのは、側妃に不当に辞めさせられた王城の有能な侍女や女官などを再雇用するために、色々な準備が必要らしい。

ティーモ兄様も、夕食まで座学に戻ってしまった。

屋敷の使用人たちもいつものように仕事をし、暇な者は俺だけである。

うーん。

もう日が暮れてしまっているし、せっかく着替えたりしたし、今から【妖精の箱庭】に行くのも微妙だ。

商業施設の設計施工指針書とかテナント店舗の企画書を書いていきましようかね。

ギルと一緒に部屋に戻った俺は、早速指示を出す。

「ギル、紙と書くものをお願い」

「かしこまりました」

ギルを待っている間、俺に与えられた部屋の床に浄化をかけ、厚手の絨毯を床に広げ、靴を脱ぎゴロリと寝転がる。

少し厚手の魔獣皮紙と魔道具のペン（インクの注ぎ足しがいらないのだ！）を持ってきたギルにお礼を言い、寝転がりながら商業施設に関する企画書を書いていく。

さながら幼児のお絵描きスタイルである。

ちなみにアルはいえ、俺の隣でコロコロ転がっている。

ギルは部屋を出て行ったけど、独り言だと思われても嫌なので、脳内でツクヨミと相談していく。

「うーん。劇場とか作ったら、何かに使えるかな？ 外観は、日本橋のライオンに護られた老舗デパートのようにして……」

『那由多っ！ できればです！』

『そうそう。デパ地下も……地上三階、地下一階、屋上に今は懐かしき日本風の庭園に、ツクヨミを祀る小さな社も造ってしまおうか』

妄想が無限に湧いてくる。

あの老舗デパートは七階建てだが、この世界にある建物で、そんなにデカイものはないので、そのまま作ったら浮いてしまうだろう。

ここは周囲に合わせて三階建てにしちゃおう。

建築職人の雇用も生みたいところだが……クソ女神の教会跡地が売り払われた都合で、これから国内中あちこちで建築ラッシュになるだろう。

そうすると、雇用を生むどころか職人の手配も大変そうだ。

『ドワーフたちにジオラマ規格の建物を作ってもらって、【妖精の箱庭^{ザ・シークレットガーデン}】に設置し、アンダーザローズ内で収納して、建設したい土地に出せば良いのではないですか？』

『ああ！なるほど！』

全く考えていなかった方法だ。

家具で試したことがあるのだが、ジオラマサイズで作ったものを【妖精の箱庭^{ザ・シークレットガーデン}】に設置して、アンダーザローズの中に入って見てみると、普通のサイズで置かれていることになる。

それを収納して、アンダーザローズの外に出て収納から出しても、ミニチュアサイズではなく、普通のサイズで取り出すことができるのだ。

質量保存の法則とかどうなってるんだとも思うが、まあ魔法なんてモノがある異世界ですから。

そしてこの仕様は、建物でも同じはず。

ドワーフに依頼してミニチュアサイズの建物を作ってもらって、それをさっき言った方法で取り



出し、帝都の土地に置けばいいのだ。

そんなサイズのミニチュアを作ってもらうのは大変だろうけど……ドワーフなら慣れているだろうから問題ないね。

『ということは、ふんだんに貴重な素材が使えるね』

金とか銀とか。

作る時は小さいがゆえに、高級な造りができると。

……そうなると調子に乗って色々と妄想してしまう。

なんだったら、この国には百七十九の村や都市があるそうだから、賛同してくれる都市の分だけ地方アンテナショップを作るのも良い。

母様たちが考えた洋服屋や、地下一階のグルメゾーンもケーキやパン、惣菜などジャンル別にふんだんに。

劇場は三階と四階を半分ぶち抜いて豪華な造りにしてしまおうか。

そんな風に思い付いたことをスラスラと書き写し、お祖父様にしっかり説明できるよう外観や内装のイメージなどを書き込んでいった。

そうそう、アルはいつのまにか、大の字になって寝てたよ。

帝国の皇子×ケット・シーの村の効果

『パパ……!! 私のためにこの忌々しい糸を解きに来てくれたのね!! あの子ったら酷いのよ……この星のために私に力を寄せすぎないばかりか、私を縛り付けたのよ……!!』

でき損ないの繭のように、糸によって雁字搦めに封印されたソレ——ナユタたちに糞女神と呼ばれるその存在が、そんな風に訴える。

しかし、浮き上がった小さなカーバンクルは、ただ静かに見ていた。

その目は冷たいが、ソレは気付いていない。

『私をこの忌々しい糸から解放して、私のために邪魔なあの子を残らず消してほしいの……!! お願ひよ!!』

『……君は相変わらず哀れで強欲で、残念な子だよ。星の命を導くという僕との約束を忘れて力に溺れ、罪を贖う気持ちさえ失ってしまったのか』

呆れた声色でそう言いながら浮き上がった小さなカーバンクルは、巨木に括り付けられた巨大な何かにふわふわと近寄る。多くの星の命を自身の欲望のために消した罪人に。

『私は哀れでも残念な子でもないわ! 残念で哀れなのは矮小な欠片になってしまったあの子の

方よ。パパ……パパ……私を助けて……』

『この封印は解いてあげるよ。君も大事な僕の星の命だもの』

『パパ……!!』

繭の中から耳障りな甲高い歓喜の声があつたが……

『でも……君が消した魂たちの輪廻を優しく見守るだけ。その約束を守れない子はだめだよ。たとえ僕の選択が間違っていたとしても……僕の星と星の子を傷つける子は、もう要らないかな』

◇ ◆ ◆ ◆ ◇

お祖父様が帰ってきた、翌日。

今日は朝からお祖父様が屋敷にいて、久々に家族みんなで食事ができた。

昨日の夜は、結局バタバタしていて、ゆっくり話せなかったからね。

俺の隣で椅子にちよこんと座っているアルは、アルに合わせて小さく作ってもらったたまごのサンドイッチが気に入ったようで、両手で抱えて口いっぱい頬張り嬉しそうに食べている。

食事中的話題は、お祖父様がいなかった、猫妖精の村での話だ。

母様とティーモ兄様が、楽しそうにお祖父様に話している。

お祖父様も、お祖父様の祖父……ロドウルフさんの日記から、行ったことはないが村の存在は

知っていたらしい。楽しそうに話を聞いていた。

そしてなぜか、ティーモ兄様に確かめるように、屋敷に帰ってきてからちゃんと眠れているかと聞いていた。

というのも、心因性のものなのか、ティーモ兄様は夜中に何度も起きていて、猫妖精の村に行くまでちゃんと眠れていなかったんだそうだ。

情けないことに、ティーモ兄様と一緒にいたはずの俺は全く気付いていなかったが。

朝が弱かったのは、それが理由だったみたいだ。

そしてそれが解消されたから、この屋敷に来てからは早起きして剣の稽古をしているそうだ。なるほど、そういうことだったのか。

猫妖精の村には、心を落ち着かせたり、落ち込んだ心や気分を向上させ正常に戻したりする作用があるそうだ。

お祖父様の祖父……ロドウルフさんも、領内で流行病や干ばつに不作などの災害が降り掛かって手詰まりだった時、頭を冷やすために猫妖精の村に行つて心を落ち着かせたことがあったそうだ。なるほど、それでティーモ兄様も改善したのではないかと思っただな。

ちなみにロドウルフさんは、乾いた土地でも育つ植物や流行病に効く薬などの知恵を授かっていてらしい。

しかし、そんな効果があつたなんて……

よくよく考えたら、ツクヨミがリラックスしていたり、王様が大変なのにキアランもロウエンもまったりしていた。俺も忍者の真似をしてはしゃいでいたし。

それに、俺たちを護る任務があるはずの護衛たちが酒を飲んで酔い潰れていたっけ。そんなことは護衛任務であるなら絶対に許されてはならないことなのに。

ティーモ兄様のことを心配していた母様は、もしかして帝都を出る前に、すでにスキルでここまで見ていたのか……？

母様は、自分に関わる者の運命が少し見える【糸を紡ぐ者】というスキルを持っている。

これまでも、このスキルで見えた未来を変えるために動き、実際に未来を変えたことがあるそうだ。

今回も、より良い未来になるように動いたのかもしれない。

そうしてひとしきり猫妖精の村の出来事をお祖父様に話して、朝食を終えた。

そして、お祖父様は今日は一日お休みだそう。

せっかくなら少し時間を貰えないかということで、お祖父様母様とティーモ兄様を呼び止め、建設物の企画書を見てもらうことにした。

お祖父様の書斎に移動して、昨日描いた企画書を見せる。

「これは、俺が前にいた世界にあった、デパートという建物です。色々なお店や劇場、食事処などが入っている、複合商業施設ですね」

そう言って企画書を見せると、お祖父様も母様もティーモ兄様も、すごい勢いで食いついてきた。「なるほど……しかしこれは、庶民向けのものか？ 貴族も来られるように、内観や外観を豪華にしたり、馬車止めを設置したりできないか？」

「内装は豪華にするつもりでしたが、たしかにもっと貴族の皆さんが来やすいようにしてもいいかもしれないですね……」

それから話し合いを続けると、みんなが特に何に興味を持ったのかがわかった。

お祖父様は、紳士の社交場になるような酒を出すカフェ、遊戯室、それから特に、各領地の物産を売らせる、というのが目新しかったらしく、詳しく聞かれた。

それと母様も、小規模の茶会ができるような喫茶室、それから劇場や服飾店、化粧品店に目を付けていた。

ティーモ兄様は食べ物類や玩具屋に魔道具店などが気になったようだ。

詳しく聞けば、魔道具でもない玩具というものは帝国内にはないらしい。

メンコやベーゴマ、竹蜻蛉やけん玉、それからパズルなんかについて説明すると、とても食いついてきた。

あとは……昔妹が持っていたぬいぐるみや着せ替え人形に塗り絵なんかを提案してみてもいいかもしれない。

魔道具屋や武器屋など、出店してくれる人がいれば良いが、それも簡単に見つかるかどうかはわ

からない。

とりあえずは、お抱えの商人に頑張ってもらうしかないだろうが、規模が大きくなれば、それだけでは間に合わなくなる。

誘致についても考えないといけないよな。」

そうして意見交換をし、話は領内のイベント……収穫祭と狩猟祭のことに移行した。

「収穫祭は各領内の者たちが祝うので、それほど他領の者は参加しない。しかし狩猟祭は、近隣他領からも、貴族を含めて参加者が来るのだ。通常であれば、皆で狩猟をするだけなのだが、そろそろ目新しい物も開催したいと、ここ何年か思っていたのだ。だが今年は色々あったし、生憎と良い案が浮かばなくてな……」

なるほど、いつもと同じようなものではなく、新鮮な風を入れたいのかな？

貴族というと大所帯で来るそうだから、兵士も騎士もたくさん来るだろうし……

あ。騎士といえば……

「お祖父様、騎士たちの馬を競わせるのはどうでしょう？」

「騎士の馬術ではなく馬を？」

お祖父様はピンときていないようだ。

俺が思いついたのは競馬だ。

せっかくいろんな土地の、貴族が所有するほど優秀な馬が集まるのだから、競い合わせても面白

いんじゃないか？

前世の競馬の仕組みに詳しいわけではないけど、紳士の嗜みとして多少なら知っているの、それを説明してみた。

「はい。単純な速さを競うのは勿論、決められたコースを進み障害物を飛び越えて速さを競わせるような競技も作ります。例えば、ペース配分を考えた長距離走、小山など障害物がある場所では重量物を引きずって力のペース配分を考えながら速さを競うものなど……勿論、騎乗して人馬一体となり挑むので、騎手の技量が重要です。その点においては、馬術と言っても過言ではないのですが」

お祖父様は顎に手をやりながら考え込む。

「騎士たちの馬上槍試合は、国の祭事などで御前試合をするのだが……馬だけの試合か」

「そうです。勿論、乗っている騎手の腕にもよりますが、お祖父様の領地には特有の馬がいますし、他領としても、馬の宣伝になって良いのではないのでしょうか？ 私がこの体に入る前にいた世界では、それを賭け事にして巨額の収益を得ていましたよ」

確か、主催者に一レースで百億という巨額の金が舞い込んだこともあったようだし。

賭けている方は一瞬で天国と地獄が分かれるが、主催側は上手くすればどんどんプラスの収益になる。

上手くいけばけどね。

「巨額の収益……ナユタ、少し詳しく聞いても良いか？ 国の財政が心許なくなてな。もし我が領で馬の競技を開催し、うまく収益を出せるようであれば、国としても開催できないだろうか。それこそ、今度の戴冠式たいかんしきの時には開催できたらと思うのだが……」

戴冠式か。

北の帝国では本来ならば、皇帝即位に際して、二つの儀式が行われる。

継承したことを国民に宣言する【即位の儀】と、各領地に散った貴族たちを召喚し、皇帝の証となる宝具を継承するのを見届けさせ、忠誠を誓わせる【踐祚せんその儀】というものだ。

後者がいわゆる戴冠式と呼ばれているのだが、俺の父様である皇帝は、国内のごたごたのせいで、そちらを行えていないのだ。

お金の話をしたのも関係あるだろうが、お祖父様おじいが乗り気になってくれたぞ。

俺が少しでも知る日本の知識となってしまうが、各地で開催されるレースや利益の配分、賭け方の種類など、知っている限りを細かく説明した。

あまり細かいと計算が厄介やっかいではあるのだが……

まあ、その辺は計算が得意な人がいるだろうから、任せてしまおう。

「七十五パーセントを払い戻し、十パーセントを国庫納付金、十五パーセントを主催者の利益に……なるほど。よほど下手な運営をしない限り、損をすることはなさそうだな。勿論、いきなり利益が出るとは思っていないが」

お祖父様おじいはそう言っただけだ。

「ふむ。各領に、馬術に長けた騎士や速さや力自慢の馬を連れてくるように通達しよう。最初は何事も戸惑うこともあるだろうし収益もないかもしれぬが、やってみなくては何も始まらぬし説明もできないからな」

お祖父様おじいは考えに柔軟性があつて、行動も早い。

早速屋敷にある通信魔道具クリスタルが置かれた部屋に向かつていった。

おそらく、狩猟祭に参加する各領の領主に通達するのだろう。

母様もティーモ兄様もこの後用事があるそうなので、とりあえずここは解散となる。

というわけで、手が空いた俺は、一人調理場へと向かった。

俺も今日の午前の授業はないので、ずっとやりたかったことをしようと思ったのだ。

それは、パン酵母こうぼ作りである。

パン種も色々種類があるけれど、今回俺が作りたいのは、酸味が少ない甘く柔らかいパンにできるもの。

こっちの世界のパンも、美味しいんだけどいかにもヨーロッパのパンというか、すっぱくて固いものばかりなんだよね。黒パンとか全粒粉の田舎パンとか。

まずは米麴こめこうで作る酒種だ。

作っておいで良かった、お味噌さん。

米麴は問題なく手に入る。

これで間接的に、酒を摂取できると言っても過言ではないだろう。

糖分を餌に発酵するという点ではパンも酒と変わらぬと思うし。

レーズンとかリンゴとか果物でもできるからとりあえず何種類か作ってみて……今は葡萄が旬だし、ついでにワインなんかも仕込めば俺が大人になる頃には……

『那由多……お顔が残念なことになってますよ……』

おっといかんいかん。今の俺は純真無垢な三歳児である。

ペチペチとほつたを両手で叩きながら、緩んだ顔を元に戻す。

頭の上に乗っているアルが、首を傾げて俺の顔を覗きながら、同じようにほつたをペチペチするのがちよつと視線の端に見えた。

そんなふうには先々のことを考えつつスキップをしながら、調理場に到着。

すると昼食の準備か、料理人たちがあくせくと働いていた。

そりゃそうか、今は忙しい時間帯だよな。

「こりゃあ、ナユタ坊ちゃんじゃありませんか。どうされたんです？」

ひよっこり扉から顔を出した俺に気付いた料理人が近寄ってくる。

「忙しい中お邪魔してすいません。ちよつと作りたいものがあつて……瓶を貸してもらってもい

い？」

「瓶……ですか？ お安いご用で。もしかして坊っちゃん、また面白い調理法を編み出したんですかい？」

そう言つて興味深そうな表情になる料理人さん。

実は、公爵家に着いた翌日からこの調理場で色々作つて料理人さんたちと意気投合し、お友達になつたのだ。

特に酒のアテとなる濃い味のポテトチップスは好評であつた。

「いえ。ちよつとパン種を作りたいです」

「パン種？ このグラキエグレイペウスの公爵家も、代々引き継いでいるパン種がありますよ。いつも召し上がつていただいているものですが」

料理人はそう言うと、代々引き継いでいるというパン種のところまで案内してくれた。そこにあつたのは、俺の背丈くらいの大きな甕。

抱え上げてもらつて覗き込むと、その中には沸々と元気に蠢くパン種があつた。

サクッと鑑定をしてみれば、やはり小麦粉やライ麦に水を入れて発酵させたもので、日本ではサワー種と呼ばれる、少し酸味があるパンの素だ。

俺は下ろしてもらつてから、首を横に振る。

「公爵家のパンも美味しいのですが、今回試したいパンがあつて。何個かパン種を作りたいんで

すよ」

「なるほど。また面白いことを始めようってんですね？」

料理人はそう言くと、何本か瓶を持って来てくれた。

「こちらの瓶でよろしいですかい？」

「ありがとう！」

お礼を言って瓶を数本、マジックハンドで受け取ると、早速、自室に戻る。

さあ、酵母作りに取り掛かるう。

まずは瓶を綺麗にして……ストックしておいた炊いたご飯に麴、そして水を入れて蓋をして……
シャカシャカ混ぜる。

……以上。

酒種は一日一回シャカシャカして終わりなのだ。

それから、林檎などを収納から取り出し、水と共に瓶に入れ、酒種と同じようにシャカシャカ振る。

ついでに葡萄も潰して樽に果汁を入れたら、暖かい部屋に置いておけば完了である。

しばらくシャカシャカ瓶を振る作業が、俺の日課になった。

閑話〜ティーモの朝〜

チチチピチュピチュという音が、微かに耳に入ってきた。

僕はもそもそと上半身を持ち上げ、ふわふわのお布団から這い出ると、思いつき伸びをする。

「ふあ〜」

起きた時に思いつき伸びをするのは気持ちがいい。

僕は、ティーモ。ティーモ・シュルツIIグラキエグレイハウス。

最近肌寒くなってきたから、いつもの冬支度のように魔獣の重たい毛皮をかけようとしたら、ナユタが魔鵝を大量に狩って羽毛を引っこ抜いて、このお布団を作ってくれたんだ。

とっても軽いしあったかいの。

ナユタは最初、魔法で羽毛を引っこ抜いていたんだけど羽毛がいっぱい舞って、ナユタがくしゃみを何度もしていたよ。

しばらく経ってから大きな声で、

「最初から解体魔法で羽毛だけ取って収納すればいいんじゃない!!」

とか言ってゴロゴロしていたよ。

ナユタって面白いよね。

なんでも知ってるしなんでもできるけど、たまにおっちょこちよいなの。

本当にかわいい弟だよ。

ベッドの上でボーっとしていたら、外が大合唱になってきた。

魔鳥……引き裂き鳥たちがご飯を求めて飛び回ってるのかな？

あの子たちもそろそろ冬支度が始まって、ポワポワした羽毛が生えてきてるかも？

冬の魔鳥は真っ白で丸くて可愛いんだ。

まだ僕が小さかった時、魔獣なら引き裂き鳥も討伐したかどうか？ とお義父様に言ってみたことがあったんだ。

でもお義父様は、なんでも無闇に殺生をしてはならないって言っていたよ。

この世界の生き物はみーんな、大きな『まんまる』を歩いていて、それぞれ引き継いでいく役目があるんだって。

引き裂き鳥は草木に害を与える虫や土を汚染するゴミなんかを食べて、その排泄物が土の養分になって森を育てる役目があるんだって。

森に生える草木も、僕たちが使う魔法薬になったり実を実らせたり、食べ物を与えたりしてるんだ。

生き物がいなくなっても、大きなまんまるを切らず次々引き継いでクルクル回って大地に還る

んだって。

僕の亡くなってしまった本当のお父さんもお母さんも……それから一族のあの子たちも、今、大きなまんまるをゆっくり歩くティームより、ずっと先にいるよってお義父様が言ってたんだ。

だから、僕が大きなまんまるをもっと速く走れるようになって追いついたらみんなを驚かせたいな！

ナユタも夏に引き裂き鳥を見た時に、討伐はしないんですか？ って真顔で僕と同じことを聞いてたよ。

だから、僕もお義父様と同じように説明してあげたよ。

「なるほど。魔物……いや、魔獣も食物連鎖の一つになっているのか……じゃあ魔物は……輪廻の概念もあるのか？」

なんかブツブツ言いながら考え込んでいたよ。

ナユタはよく独り言を言っていたり、会話中に突然黙ってしまったりすることが多いんだ。

それでずっと不思議に思っていたんだけど、お義姉様が言うには、神様とお話ししてるんだって！

お義姉様は一度だけ神様に会ったことがあるけど、ナユタだけはいつもお話ができるって言っていたよ。

なんかがやっぱり、ナユタは面白い！

ベッドから起き出して、ナユタに教えてもらった起きたら朝一番にやるっていう『らぢお体操』をしていたら、侍従たちが軽食を持ってきたり、身だしなみを整えたりしてくれたよ。

今日はこれから、剣のお稽古をするんだ。

この国の貴族の子供は、必ず通うことになっている帝国立の魔法学園でいい成績を残すために、お勉強もしなきゃいけないの。

僕はお義父様みたいに、魔法も剣も両方とも使えるような、とっても強い魔法騎士になりたいんだ。

この前お義父様に、この国の皇子であるナユタの護衛や側近を将来的に探すことになるって聞いたから、僕が立候補するんだ！

僕は小さなナユタのお兄ちゃんだから守ってあげたいの。もう悲しい思いはしたくない。

そのためにはお義父様みたいに、とおっても強くなきゃならないから、頑張るんだ！でも、ちょっとだけ……ナユタと遊べないのが残念かな。

支度が済んだら、グラキエグレイペウス公爵のお家の外にある鍛錬場まで走っていくよっ！

鍛錬場では、剣を教えてくれている師匠が待ってくれていた。

「師匠！ おはようございます！」

「ティーム様、おはようございます。ホッホッ。今日も元気があってよろしいですね」

「えへへっ」

師匠は、先代グラキエグレイペウス公爵の右腕だった人だ。

今もグラキエグレイペウス公爵家騎士団の指南役もしてくれていて、お爺ちゃんだけと凄い人なんだよ。

お義父様よりも小さくてほっそりしてるのに、剣技だけならお義父様よりも上だって、お義父様が言っていたんだ！

すごいよね！

「ホッホッ。本日も立ち方、足捌きを練習いたしますよ」

「はあーい！」

今日も重たいロングソードを構えながら足捌きを習うよ！

足捌きは、毎日毎日一つ一つが積み重ねなんだって。

無意識に足を運べるまで、何度も何度も練習あるのみ！

でも、剣は下ろしちゃいけないし、足もいっぱい動かすことになるから、腕も足もとっても疲れるんだ。

初めの頃は終わったら腕も足もパンパンになったっけ。

ナユタがポーションを塗ってくれたらとっても身体が軽くなったけど、ポーションで治したら筋力がつかんって師匠に怒られちゃったの。

だからそれ以来、ポーションは禁止。まあ、それなりに慣れてきたから、手足がパンパンになる日は少なくなってきたけどね。

それにしても、あの時の師匠^{せんせい}、とっても怖かったなあ。

ナユタも、

「っ！ 申し訳ありませんでしたっ」

って小さいのにもっと小さくなっていたよ。

よし！ 今日頑張るぞ！



「ヤアッ!!」

「朝の分はここまでにいたしましょう。ホッホッ。よく頑張りましたな」

「はいっ！ ありがとうございます！」

足がガクガクするよ。

僕と同じように動いていた師匠^{せんせい}は、この後も騎士たちの訓練を見るみたいだけど、僕はもう限界だ。

よたよたとお部屋に帰ると、侍従たちが体を拭^ふいてくれたよ。

この後は朝食！

晚餐の大きなお部屋と違って、小さな居間で家族四人で食事をとるんだ。

家族の近くでお話できるから、僕は晚餐の大きなお部屋で食事をとるよりも、居間の方が好きなんだ！

ナユタも同じことを言っていたよ。

「おはようございますっ」

「おはよっ、ティーモ」

「おはようございます。ティーモ兄様」

ふふ。

お義姉様がお嫁に行ってから、お義父様と二人だけだったけど、今はナユタも増えてとっても嬉しい。

でも、次の春が来たら、お義姉様もナユタも、都にあるお城に行っちゃうことになってるんだよね。

だからちょっとだけ、春が来なければいいなって思ってしまう。

でも、僕も来年からは魔法学園で頑張るんだ！

「ふんむっ！」

「？ ティーモ兄様どうかしたのですか？」